

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：13501
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2019～2023
課題番号：19K02612
研究課題名(和文) 乳幼児期の学びの質を維持・向上させるカリキュラムマネジメントの開発に関する研究

研究課題名(英文) Research on the development of curriculum management to maintain and improve the quality of learning in early childhood

研究代表者
大野 歩 (OHNO, Ayumi)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：60610912
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、スウェーデンの「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」をもとに、日本における「乳幼児期の学び」の質を維持・向上させる新たなカリキュラムマネジメントの手法を開発することにあった。研究方法は、スウェーデンの現地調査と、日本における実践研究である。研究の結果、乳幼児期の学びを育む保育実践にかかわる理論モデルとしては、遊び学び理論、リゾーム型の学び観、保育における「子どもの視点」の重視といった3要素が重要であることが明らかとなった。他方で、保幼小の接続期においては、これら曖昧さを明瞭化することで、「学校化」プロセスが進行することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、乳幼児期の学びを育む保育カリキュラムマネジメントにかかわり、スウェーデンにおける現地調査と日本における実践研究から、文献調査に基づき、重要な3つの要素に基づく理論モデルを提言した、実証研究を通じ、子どもの視点を重視する保育実践の実相と、実践における保育者の役割を明らかにした。乳幼児期の学びを義務教育へ接続する接続期において、保育実践特有の曖昧さを明瞭化することで「学校化」プロセスが進行する事例を示した。これら研究成果は、わが国の保育・幼児教育において、「学び」を育むという視点からの理論的・実践的視座をもたらすとともに、保幼小接続期において留意すべき点を示したことが意義深い。

研究成果の概要(英文)：The aim of the study was to develop a new curriculum management method to maintain and improve the quality of 'early childhood learning' in Japan, based on Swedish 'pedagogical documentation'. The research method consisted of a field study in Sweden and a practical study in Japan. The results of the research revealed that three elements were important as a theoretical model for ECEC practices that nurture learning in 'early childhood: (1) play-learning theory, (2) a rhizome-type view of learning, and (3) an emphasis on the 'child's perspective' in ECEC. On the other hand, it was suggested that the 'schoolification' process proceeds by clarifying these ambiguities during the connection period between preschool and primary schools.

研究分野：幼児教育学

キーワード：保育 リゾーム型の学び 子どもの視点 教示的無関心 スウェーデン 接続期教育 学校化

1. 研究開始当初の背景

わが国は超高齢・人口減少社会といった未経験の社会的局面へ向かっており、社会の質的变化等を踏まえた現代的な課題に即して、これからの時代に求められる人間のあり方や教育内容・方法が問われている(文部科学省 2015)。これを受け、平成 29 年度告示の新しい保育所保育指針・認定こども園・幼稚園の教育要領においては「乳幼児期の学び」が新たなキーワードとなり、小学校以降の教育を見通した資質・能力を育みつつも子どもの主体的な遊びを支える保育実践と、それら実践の質を恒常的に維持・向上させるカリキュラムマネジメントの必要性が求められた(文部科学省 2018)。しかし、子どもの実態に基づいて保育計画を立てる乳幼児期の保育・教育は、計画立案からスタートする PDCA サイクルにそぐわない側面がある(垂水 2010)一方で、教育要領等の改訂に伴った具体的な実践・評価手法は提示されぬまま現場の裁量によるものとなり、園が各々に手探りで始める状況が拡大している。このため、幼稚園教育要領などに基づいた保育計画を立案しつつも、個々の子どもの実態に即した保育実践の実施・評価・改善を図るためのカリキュラムマネジメントを確立させる手法の開発が喫緊の課題となっている。

翻って、欧州を中心とする国際社会においては、ポスト工業社会における知識基盤型経済に貢献する人的資産への投資が重視され、とりわけ乳幼児期の保育・教育は、グローバル化した世界における経済競争力を維持する戦略の一環として各国の政策において重要な位置を占めている。このため、EU ではここ 10 年の間に、保育政策の視点を保育の量的拡大から保育の質の向上へと転換し、各国はそれぞれ就学準備型と生活基盤型という 2 つの立場から知識経済を支える新たな保育・教育システムやカリキュラム・実践方法を模索してきた(Vandenbroeck2016)。当初は乳幼児の発達的特徴を考慮すると生活基盤型モデルが適すると言われていたものの、小学校教育との接続が重視される中で、近年では各国が就学準備型に傾倒しつつあり、乳幼児期の保育・教育が学校教育のようになるのではないかという懸念も囁かれている(Kaga,et.al.2010)。

こうした中、スウェーデンは乳幼児期の保育・教育を生涯学習制度へ包摂させるという独自の生涯学習モデルを基盤に、幼保一元化した就学前施設を教育制度の第一段階に位置づけて学びの場へと積極的に再編することで保育の質を向上させようとしており(大野 2017) その取り組みはヨーロッパを中心とした国際社会において大きな注目を集めている(Vandenbroeck2016)。特筆すべきは、「ペダゴジカル・ドキュメンテーション(教育的ドキュメンテーション)」という保育の実践評価手法によって、個々の子どもの学びと成長を記録するのに加えて、保護者や保育者など子どもとかわる大人の学びを促進し、持続的に実践を発展させていくようなカリキュラムマネジメントを用いている点である。「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」は、子どもの実態把握・保育計画の立案・実践・評価・改善のサイクルを形成するのみならず、家庭との連携、小学校との接続、さらには保育カンファレンスや保育者の省察など保育にかかわる活動において多岐にわたって活用できる機能を備えている(大野 2014)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、スウェーデンの「ペダゴジカル・ドキュメンテーション」をもとに、日本における「乳幼児期の学び」の質を維持・向上させる新たなカリキュラムマネジメントの手法を開発することにある。

本研究における学術的独自性は、従来、乳幼児教育界で議論されてきた就学準備型でも生活基盤型にもよらない、第 3 の生涯学習型保育モデルという枠組みを援用することにある。これに

より、わが国における子どもの実態からスタートする保育計画の立案と、実践・評価・改善のサイクルを形成しつつ、その過程で子どもの学びと大人の学びをともに促進して、保育実践を持続的に発展させていくカリキュラムマネジメントを可能にする。

3．研究の方法

本研究では、研究期間を5年間に設定する。その間、研究分担者や研究協力園との連携のもとに、「スウェーデンにおけるペダゴジカル・ドキュメンテーションの活用実態調査」と「日本におけるペダゴジカル・ドキュメンテーションを活用したカリキュラムマネジメントの検討」の2側面から、文献調査と実地調査による理論モデルの開発、およびアクションリサーチによるモデルの検証を行う。

4．研究成果

(1) 乳幼児期の学びを育む保育実践にかかわる理論モデルの開発

乳幼児期の学びを育む保育カリキュラムマネジメントの理論モデルの開発にかかわり、乳幼児期の学びの質を維持・向上させるためには、以下、3点の要素が重要であることを、文献調査により見出した。

遊び—学び理論

スウェーデンのペダゴジーを基盤とする保育実践では、子どもは周囲の世界と分離されず、互いに密接に関係して存在すると捉えられ、子どもが周囲の世界における多様性を受け入れると、周囲の世界もまた子どもの一部になるとみなされる。そして、個々の子どもの世界に対する理解の仕方は、そのままその子の人格を形成する一部になる。したがって、知識は各々の子どもが様々な方法で周囲の世界を経験して意味づけた非常に個人的なものであり、子どもが周囲の世界と対話をする際の内的な発動が、外側の世界においては遊びや創作物となって現れると解釈される。このため、乳幼児期の遊びと学びを同じコインの表と裏のようなものとして捉える。このように遊び—学び理論に基づくと、乳幼児期の遊びは子どもの学びの過程そのものであり、発達を中心に位置づくと考えられることが見出された。

リゾーム型の学び観

スウェーデン学校庁が刊行した保育評価のガイドラインには、学習はもはや個人的で孤立した活動ではなく、周囲の環境及び他者と相互に関連づけられるものであると記されており、教育的ドキュメンテーションを通じて見いだそうとされる子どもの学びは、リゾーム(rhizomer：根茎)という概念を基盤にしている。リゾマティックな思考によれば、乳幼児期における学びはあらかじめ地図に載っているルートをたどるものではなく、予測不可能な道を少しずつ行ったり来たりするものとして捉えることが前提となっており、これら学び観に基づいた実践及びその評価手法の活用が有用であることが明らかとなった。

保育における「子どもの視点」の重視

遊びは子どもの発達、学び、ウェルビーイングを育む重要性があるため、保育実践において中心的な役割を果たす。つまり、乳幼児期の自由で自発的な遊びを通じた学びは子どもたちの日常生活の中に織り込まれており、子どもたちは自身の可能性を言葉で表すにとどまらず、遊びによって物理的に示すことができると理解される。したがって、子どもたちは生活や遊びの中で常に彼らの能力を示す機会をもっていると捉えながら、保育を編成することが重要となってくる。ただし、保育の文脈においては、子ども目線(barnperspektiv)と子どもの視点(barns perspektiv)

が混同されている。子どもの視点というのは、大人と同じように子どもが活動や周囲の環境へ能動的にかかわり、子ども自身の願いやアイデア、視点、見解を実際の保育の活動や環境デザインへ反映させていくことを指す。そのため、子どもたちが捉える周囲の世界への理解とその体験を、保育者が理解して子どもたちの意味づけを支えていくために、子どもの声に耳を傾ける必要がある。ただし、子どもの視点に立って、子ども自身がどのように考え知覚するかを大人が本当に理解するためには、大人が子どもたちを観察して記録するだけでは不十分であり、保育者が子どもとの相互作用を確かに機能させたとき、ようやく子どもは自分が耳を傾けられていると実感できると考えられる。

(2) 乳幼児期の学びを育む保育実践モデルの検証

【検証1：子どもの視点と保育者の役割の検討】

(1) で見出したモデルの検証を行うために、日本の幼稚園における5歳児の遊びの変容に着目して、「子どもの視点」と「保育者の役割」の2側面から、幼児の学びのプロセスを解釈的に検討した。対象は、Y幼稚園の5歳児クラス(総数22名)における子どもの遊びである。期間は、20XX年10月から20XX+1年3月の6か月間である。方法は、保育時間内における遊びの参与観察と記録(筆記・写真・動画)とする。研究の結果、子どもたちの遊びはリゾームのように広がり、学びの立ち上がり 体験的な学びの蓄え 体験知を表出する学びの深化 学びにおける体験知の汎用 という4つの位相をくぐりながら、質的に変容することが明らかとなった。その過程では、「子どもの視点」が「富士山」「噴火」「マグマ」「石」「鉱物の種類」へと徐々に移行し連なっていく糸筋が示された。保育者の役割としては、以下の4つが見出された。(a) 【共同探究者】的立場：子どもと同じ視点から、遊びの中で生じてくる現象へ共に心を動かす。(b) 【コーディネーター】的立場：子どもの学びに向かう内的な要求を聴き取りながら、子どもと新たな「もの」「人」「事象」をつなぎ、子どもと環境を結び直す。(c) 【ナビゲーター】的立場：遊びの変容を見守りながら、短期的な子どもの志向性に応答しつつ、子どもの中長期的な育ちを見据えて支えようと、意図的・計画的に働きかける。(d) 【創造者】的立場：自分の中にこれまでの経験によって既に形成されている保育実践道を通りたくなる気持ちを抑えつつ、敢えて「子どもの視点」で展開する活動に身を委ね、子どもが辿る道と一緒に通り抜けていくことで、自分自身も新たな経験を重ねようとする。

【検証2：子どもと保育者の相互行為の検討】

(1) で見出したモデルの検証を行うために、【検証1：子どもの視点と保育者の役割の検討】で示された子どもの視点と保育者の役割が、どのような相互作用によって形成されていくのかを明らかにするために、「教示的無関心」という視点から保育実践における保育者と子どもの相互行為を分析した。対象は「森のようちえん」を標榜するB幼稚園とし、20XX年11月～12月において、園内の森における自由遊び場面を観察した。研究の結果、次のような点が見出された。

第一に、「森のようちえん」の遊びにおいては、保育者が非言語を含む直接的意図的な子どもとの相互行為を図っていることが明らかとなった。

第二に、「森のようちえん」における子どもと保育者の相互行為においては、保育者が非言語的行為を多く示していることが明らかとなった。これまで、「森のようちえん」において保育者が「間接的なかわり」を重視することで、子どもの自由で活発な活動を促すとされてきた点は、実は保育者の非言語的行為によって見えにくかった直接的保育行為の一環であり、そこには子どもの行為への明確な意図を持つ保育者の応答性が存在していると考えられた。

第三に、「森のようちえん」における保育者の行為は、子どもの遊びの可能性において開放性を有していることが明らかとなった。ここからは、「森のようちえん」の豊かな自然環境と保育

者の間接的なかわりによって子どもの自律性が育まれるというよりも、子どもが自然環境の中で目の前の現象と向き合いながら即時に環境との関係をつくり直していく際に、保育者の言語的・非言語的行動を介する子ども 保育者の相互行動のプロセスが基盤となって、子どもが自律的である状態が組織されていくのではないかと考えられた。

第四に、「森のようちえん」のような自然環境では、屋内で生起する子ども 保育者という言語を介したダイレクトな相互行動にはみられない、非言語的相互行動を媒介する何らかの要因が存在すると考えられた。

第五に、「森のようちえん」の遊びでは、操作できない自然環境のもとに、子どもも大人も同じ立場で活動に参加するという土壌があるゆえに、結果として、子どもの意見が活動に反映されやすいと考えられる。さらに言えば、森などの自然環境の中では、大人と子どもが「教える-教えられる」関係を超えた一人の人間同士として向かい合う必要性が生じており、そこに主体的な学びのルーツがあるのではないかと考えられた。

(3) 小学校との接続について

2023年に実施した現地調査より、保育・幼児教育と義務教育の学びを接続する接続期教育を実施する該当する就学前クラスを、義務教育化する改革が断行されたことが明らかとなった。このため、保育・幼児教育の学びの質を維持・向上するための保育実践を踏まえた接続期の義務教育が、どのように創出されようとしているのかを調査した。現地調査においては、就学前クラスへの政策の変化が実践へどのような影響を及ぼしているのかを現地検証することを目的とした。協力校は、ヨーテボリ市近郊にあるA基礎学校就学前クラス(教師3名、児童22名)である。調査時期は2023年9月X日であり、新年度のスタート直後に相当する。協力校における実践観察に際しては、写真及び筆記による記録をとった。インタビューは教師3名へ1時間ほど英語で行い、就学前クラス改革や実践について非構造的に対話した。内容はICレコーダーに記録後、文字起こしをして、フィールドノートにまとめた。検討の結果、以下のような点が見出された。

第一に、義務教育化改革後の就学前クラスにおいては、カリキュラム、評価、実践ともに「学校化」プロセスの進行が認められた。

第二に、就学前クラスの「学校化」プロセスは、接続期教育特有の曖昧さを明瞭化させたことによって進行したと考えられた。

第三に、この「学校化」プロセスは、あらゆる子どもへの保育・教育の機会均等を保障しようとする普遍主義的で社会包摂的な政策と、同時並行に生起していたと考えられた。

以上三点を踏まえると、スウェーデンにおける就学前クラスの義務教育化改革からは、接続期特有の曖昧さを学校教育の論理のもとに明瞭化することで「学校化」プロセスが進行するという事実を学ぶことができる。同時に、「学校化」はあらゆる子どもへの保育・教育を保障しようとする普遍主義的な文脈から生起する課題であることも示唆された。したがって、スウェーデンにおける接続期教育の「学校化」プロセスは、これまでの「学校化」議論とは異なる表層的には捉え切れない複雑な価値をはらんでおり、保育・幼児教育関係者へ接続期教育の意義について再考を迫る一事例になったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|-------------------|
| 1. 著者名 大野歩・七木田敦 | 4. 巻 46 |
| 2. 論文標題 森のようちえんの遊びにおける子どもと保育者の相互行為に関する研究 保育者の教示的無関心という視点から | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 幼年教育研究年報 | 6. 最初と最後の頁 n-n |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 大野 歩 | 4. 巻 34 |
| 2. 論文標題 幼児期におけるリズムティックな学びに関する研究：5歳児の遊びの変容プロセスに着目して | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 15-26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/0002000136 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 川島亜紀子、泉紗恵、野田多佳子、古屋あゆみ、吉岡良介、荻原ひろみ、澤野琢郎、細野貴寛、村田祐樹、入月安奈、笠原成晃、青木央、若本純子、大野歩 | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 幼小接続期における心理的適応：担当保育者・担当教師によるSDQ評定を用いた移行前後の変化 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 131-144 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Ayumi OHNO | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Transitions in Early Childhood Education(Japan) | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Bloomsbury Education and Childhood Studies | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5040/9781350934399.012. | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 大野歩・七木田敦 | 4. 巻 42 |
| 2. 論文標題 スウェーデンにおける生涯学習型保育について：2019年における就学前学校教育要領改訂版の実施を巡って | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 幼年教育研究年報 | 6. 最初と最後の頁 5-14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50040 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 大野歩 |
| 2. 発表標題 スウェーデンにおける接続期教育に関する研究-義務教育化後の就学前クラスの実践を中心に- |
| 3. 学会等名 日本保育学会第77回大会 |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 大野歩・七木田敦 |
| 2. 発表標題 森のようちえんにおける保育者の遊びへのかかわりに関する研究-教示的無関心という視点から- |
| 3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第33回大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 大野歩・七木田敦 |
| 2. 発表標題 保育実践における保育者の遊びへのかかわりに関する研究-保育者の教示的無関心という視点から- |
| 3. 学会等名 日本保育学会第76回大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 川島亜紀子、若本純子、大野歩、泉紗恵、野田多佳子、古屋あゆみ、吉岡良介、荻原ひろみ、澤野琢郎、細野貴寛、村田祐樹、入月安奈、笠原成晃、青木央 |
| 2. 発表標題 幼小接続期における子どもの適応の変化 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 野田多佳子・大野歩・古屋あゆみ・吉岡良介・泉紗恵・荻原ひろみ |
| 2. 発表標題 保育の質を高め合う保育カンファレンスのあり方 - 「子どもと環境の相互作用」に着目して - |
| 3. 学会等名 日本保育学会第75回大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 大野歩・古屋あゆみ・吉岡良介・荻原ひろみ |
| 2. 発表標題 幼児はいかにしてまなざしをぬりかえるか一年長児クラスにおける学びのプロセスからー |
| 3. 学会等名 日本保育学会第74回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 大野歩 |
| 2. 発表標題 スウェーデン『政治のなかの保育』からの示唆 |
| 3. 学会等名 日本保育学会第73回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 七木田敦・岡花祈一郎・飯野祐樹・小笠原文・大野 歩 |
| 2. 発表標題 就学前教育と学校教育の接続に関する国際比較 ニュージーランド、スウェーデン、フランスの調査から |
| 3. 学会等名 日本保育学会第72回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 大野歩 |
| 2. 発表標題 スウェーデン等における幼児教育・保育の「学び」を捉える取組みから |
| 3. 学会等名 第1回公開シンポジウム 幼児教育・保育における「学び」と「育ち」を探る |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 大野歩ほか | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 明石書店 | 5. 総ページ数 368 |
| 3. 書名 世界の保育の質評価 制度に学び、対話をひらく | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|---|--|----|
| 研究 分担者 | 七木田 敦 (Nanakida Atsushi) (60252821) | 広島大学・人間社会科学部研究科(教)・教授 (15401) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|